

かわさき教育プラン<基本理念>

夢や希望を抱いて生きがいのある人生を送るための礎を築く

- 「**自主・自立**」：変化の激しい社会の中で、誰もが多様な個性、能力を伸ばし、充実した人生を主体的に切り拓いていくことができるよう、将来に向けた社会的自立に必要な能力・態度を培う
- 「**共生・協働**」：個人や社会の多様性を尊重し、それぞれの強みを生かし、ともに支え、高め合える社会をめざし、共生・協働の精神を育む

下沼部小学校 学校教育目標

〔知〕よく考え、すすんで学習する子ども（やりぬく力）

- よく聞き、よく見、よく考え、進んで活動する
- 読む、書く、計算に地道に取り組む子
- 自分の考えをもち、話し合える子 ・最後まで取り組む子

〔徳〕心豊かで思いやりのある子ども（ゆたかな心）

- 進んであいさつのできる子 ・お互いに認め合える子
- 協力し合える子 ・心の痛みがわかる子
- 人を敬える子

〔体〕明るく健康な子ども（じょうぶなからだ）

- いのちを大切にできる子
- 健康や安全に気をつける子 ・体をきたえる子
- 地域の文化、スポーツに参加する子

下沼部小学校が育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
<ul style="list-style-type: none"> 何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得） 他の学習や生活の場面でも活用できるような確かな知識として習得 他の学習や生活の場面でも活用できるように習熟・熟達した技能として習得 	<ul style="list-style-type: none"> 理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成） 状況と自分との関わりを見つめて具体的に何をなすべきかを整理したり、その過程で既得の知識や技能をどのように活用し、必要となる新しい知識や技能をどのように得ればよいのかを考えたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養） 主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度

<生活科の目標>

具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。
- 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。
- 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

<理科の目標>

自然に親しみ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決するために必要な資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- 自然の事物・現象についての理解を図り、観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けるようにする。
- 観察、実験などを行い、問題解決の力を養う。
- 自然を愛する心情や主体的に問題解決しようとする態度を養う。

下沼部小学校の子どもの実態

- 生活経験や既習を根拠にするのではなく、豊富な知識をもとに考える児童が少なくない。
- 周りに自然が多い環境ではなく、生き物に接する経験は比較的少ない。
- 「考えを伝える」ことに対して消極的な児童が多い。
- 学習意欲に比べて、授業で学んだことをふり返ったり、普段の生活の中で生かせないか考えたりする習慣が見られない。

下沼部小学校の教師の願い

- 知識先行になるのではなく、生活経験や既習からも思考できるようになって欲しい。
- 授業を通して、クラスの仲間と学び合うよさについて感じて欲しい。
- 主体的な問題解決の学習の経験を、将来の生活や社会に生かせるようになってほしい。

<下沼部小学校の目指す子どもの姿>

別紙参照

研究主題

主体的に動き出し、共に学びをつくりあげる子の育成 — 科学の“め”を育てる生活科・理科授業 —

- 【主体的に動き出し】→「主体的」：自然事象に働きかけ、自ら問題を見いだしている姿
自らの意志や判断で問題を解決している姿
- 【共に学びをつくりあげる】→「対話的」：同じ目的のために対等の立場で相互に作用しながら学びを深めている姿
- 【主体的・対話的な学びにより】→「深い学び」を達成し、資質・能力を育む
- 【科学の「め」】→科学の「芽」：主体的な問題解決
→科学の「目」：対話を通して、より科学的なものに高める

○研究主題設定の趣旨

主体的に動き出し、共に学びをつくりあげる子の育成

本校では2019年度より、「**見方・考え方を働かせ、資質・能力を育む理科・生活科の授業づくり**～子どもが主体的に動き出す授業を目指して～」をテーマに設定し、学習指導要領や「主体的・対話的で深い学び」を意識しながら、生活科・理科における見方や考え方を整理し、各単元や領域がどのようなつながりをもっているかを考えて授業改善を行ってきた。成果として、理科の4領域（エネルギー・粒子・生命・地球）における見方・考え方のつながりを意識することや、日々の授業改善をしていくことの必要性を強く感じる事ができた。

しかし一方で、思考力の育成のための子どもの主体的な問題解決を実現していくことの難しさをより強く感じられるようになった。そして、下沼部の子どもたちが主体的に動き、共に学びをつくりあげていくためにはどのような手立てが有効であるかを深く研究していきたいという思いが生まれた。

そこで、2020年度より、生活科や理科はもちろんのこと、どの教科においても見方・考え方を働かせて新指導要領のキーワードである「**資質・能力**」を育成することを大切にしながら「**主体的・対話的で深い学び**」の具現化を図っていくように、**テーマを「主体的に動き出し、共に学びをつくりあげる子の育成」と設定した。**

下沼部小学校では、テーマを前半部分と後半部分に分け、それぞれに具体的なめざす姿を設定している。「**主体的に動き出ししている姿**」また、「**共に学びをつくり出す姿**」は以下の通りである。

主体的に動き出す 主体的

下沼部小学校が目指す主体的に動き出す姿とは、「自然事象に働きかけ、自ら問題を見いだしている姿」「自らの意志や判断で問題を解決している姿」「自らの学習をふり返り、次の学習につなげている姿」と捉えている。

また、問題解決のプロセスの中で、子どもたちがそれぞれ「問題意識をもち、自ら自然事象に働きかけている姿」が見られる瞬間を「**主体的に動き出した瞬間**」と考える。この瞬間は問題解決のそれぞれの場面に見られるものであり、問題意識は単元を通して問題解決に対する意欲を継続するものであると考える。つまり、動き出すとは、単に問題発見のみを示すのではなく、問題解決のプロセスの中で問題意識をもち続け、主体的に動き続けている姿をさしている。

共に学びをつくりあげる 対話的

下沼部小学校が目指す「**共に学びをつくりあげる姿**」とは、「同じ目的のために対等の立場で相互に作用しながら学びを深めている姿」と捉えている。

ここでいう「**ともに（対話的）**」は、ただ同じ目的のために対等な立場で相互に作用するだけではなく、その活動の中で他者と関わり、多くの考えにふれることにより、より多面的に物事を見たり、一人では気付かなかったことに気付く、学びが深まったりすることをさす。その他にも、自分自身の考えに自信をもちたり、新たな価値に気付いたりすることも「**共に学びをつくりあげる姿**」ととらえられる。また、ただ子どもたちがグループや学級全体で話し合いをするのではなく、そこに教科特有の見方・考え方が働くようにし、より妥当な考えに合意形成ができるようにする。

○研究副題設定の趣旨

2020年度より新しいテーマ「**主体的に動き出し、共に学びをつくりあげる子の育成**」を設定して生活科、理科の研究に取り組んでいく中で、主体的な側面と対話的な側面で様々な課題が見えてきた。

（これまでの研究や授業の実際から見えてきた課題）夏前までの反省及び年間反省より

授業を進めていく児童に偏り、教師主導の展開になりがちである…
(発表児童の偏り)

一人一人が自分事として、主体的に取り組む姿が見えにくい…

学習塾等での先行知識に頼った発言が多く、授業での学びが見えにくい…

子どもたちに意欲を持続させるような学習問題を見いださせることが難しい…

グループでの活動や話し合いを主軸とした対話的な活動場面を積極的に設定してきたが、考えを交流することに終始してしまい、生活科・理科の学びが深まっている姿が見えにくい…

生活科・理科の学習で目指していく対話的な学びの在り方を再考していく必要性を感じる…

主にテーマの主体的に関わること

学習塾等での先行知識に頼らず、目の前の現象をきっかけに、一人一人が自分事として問題意識をもち、見通しをもって問題解決を進めることを実現していきたい

主にテーマの対話的に関わること

形式的なグループでの活動や話し合いではなく、科学的な視点をより意識的にもった対話的な活動場面を通して学びを深めることを実現していきたい

そこで、この課題についてより生活科や理科の側面から考えていくため、サブテーマを「科学の“め”を育てる生活科・理科授業」と設定し、研究を進めることとした。サブテーマの内容は次の通りである。

— 科学の“め”を育てる生活科・理科授業 —

2020年度、2021年度に取り組んだ研究の課題から、主体的な側面と、対話的な側面を生活科と理科においてより具体的にするため、サブテーマを設定した。この科学の“め”には子どもたちが科学する芽（主体的な側面）、そして子どもたちが物事を科学的に見る目（対話的な側面）という2つの意味が込められている。

科学の“芽”で主体的な問題解決の力を育てる

主体的な問題解決には、材や自然事象と出会う中で問題意識が“芽生え”、その“芽”（科学的の問題意識）を大切に育てていくことが必要であるという意味が込められている。子どもが問題解決のプロセスにおいて問題意識が芽生え、問題意識を持続するための解決の見通しをもち、自ら振り返りを行うことが主体的な問題解決といえる。

主体的な問題解決を実現していくためには、まず、「材との出会い方（材の設定）を工夫する」必要がある。材の工夫により、既習や経験と関連付けてズレを見つける等、子どもたちは問題意識をもち自らの問題解決の1歩を踏み出す。また1度で結果をだすのではなく、「繰り返す事象に働きかける場面を設定する」ことで、自ら見直しを見直したり、新たなデータを求めたり、事象に対する理解を深めたりする。そして、「自分の学び方を見直し、振り返る」ことで、自ら確信したり、考えが変わったり、新しい疑問が生まれたりする。

考えをもって対話することで科学の“目”を育てる

考えをもって他者とかがわり合うのは、そのことによって、自分の考えをより科学的なものに変容させていくためである。

生活科では、子どもたちが気づきの質を高めるために友達の助言から試行錯誤を繰り返し、事象と自分とのかがわりを深める、理科では、子どもたちが問題を解決する際、自分と友達の考えを交換して、より多くの情報を収集して、客観性を高めたり、共通点を探ったりして、考えを広げたり、より確かなものにする。対話を通して、より科学的なものに高めていく。問題解決のプロセスの中、「広げる対話」や「まとめる対話」をする際に「もう一度やってみよう！」「実験で確かめられるの？」「何度やってもそうなるの？」などと科学的に、そして「本当にそうなるの？」と批判的な目で物事を見らえるようにしていくことを大切にする。

科学的—実証性・再現性・客観性
生活科的—試行錯誤・対象と自分との関わり

○テーマに迫るための具体的な手立てと関係性

